

ニュースな本 永江朗

175

読むほどにわからなくなる代理母出産

インドでの代理母事件に驚愕していたら、こんどは国内で六十一歳女性による代理母出産が報告された。卵は娘のもので、つまり生まれた赤ん坊は子であると同時に孫ということになる。まるで海棠尊の小説『ジーン・ワルツ』そのまんまでないか。

こういう報道に接すると、反射的に「気持ち悪い」と思ってしまう。だがその感覚は「正しい」のだろうか?

町田宗鳳・島薦進編『人間改造論』の副題は「生命操作は幸福をもたらすのか?」。人工生殖だけでもなく、整形手術などの人体改造や遺伝子操作、ヒト胚利用まで含めた幅広い意味での「生命操作」について論じている。しかも執筆者の専門分野が多様だ。生命倫理や医学の専門家だけでなく、比較宗教学や宗教哲学、文化人類学の専門家も書いている。

読んで「スッキリ」どころか、読めば読むほどわからなくなつてきた。うんと単純化して言うと、お腹が痛いときに薬を飲むのと、代理母出産の間には、絶対的な違いはないのではないか、と思えて

くる。メタボ解消のためのダイエットと、美容のためのダイエットとの間に、厳密な線は引けるだろうか。ケガの傷跡を消す整形手術と鼻を高くする美容整形はどこが違うのだろうか。「人工」とか「操作」がいけないというのなら、人工関節や心臓ペースメーカーもダメということになる。

不妊治療と代理母出産は地続きに見える。子宮提供者の健康が心配だというのなら、生体肝移植や骨髄移植も同様の問題を抱える。でも、じゃあインドでのようなケースもOKかと言われると、答えに詰まってしまう。

正直言つて、そこまでして血のつながった子どもがほしい、という感覺が、私には理解できない。世の中にはそういう人もいることはわかるけれども。

そういうえば、試験管ベビー第一号のルイーズ・ブラウンさんが、七月二十五日、三十歳の誕生日を迎えた。彼女は一昨年、自然妊娠で男の子を出産した。

人間改造論

『人間改造論』
町田宗鳳・島薦進編
新曜社・1800円